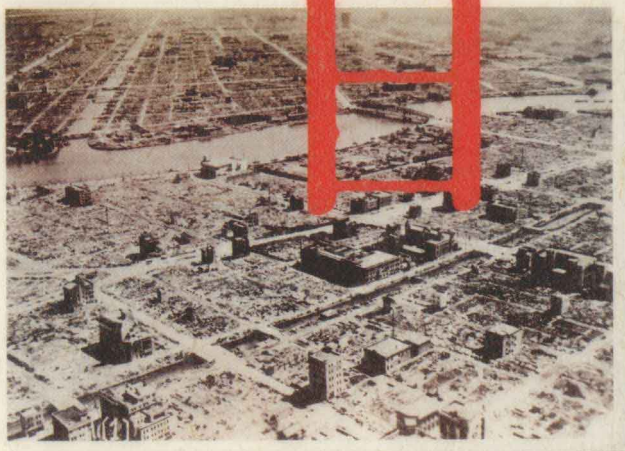


# 八月十五日 の 記

【監修】  
**永六輔**  
*Ei Rokusuke*



講談社

水ハ半冊

【監修】*Ei Rokusuke*



八月十五日  
の  
日記

講談社

## 監修者略歴

一九三三(昭和八年)、東京都に生まれる。早稲田大学在学中に三木鶏郎の「元談工房」に参加。バラエティ番組の構成を担当し、数々のヒットを生む。作詞家としても「上を向いて歩こう」(坂本九歌)、「こんにちは赤ちゃん」(梓みちよ歌)などのヒット作がある。

現在ほとんど毎日が旅暮らし。各地のラジオに出演しつつ本物の芸能の発掘につとめる。

著書には「ミリオンセラー」「大往生」(岩波新書)をはじめ、『無名人名語録』『六輔流浪人生』以上、講談社、『大語録天の声地の声』(講談社)など文庫など多数がある。

はちがつじゅうごくにちにつき

## 八月十五日の日記

一九九五年六月七日 第一刷発行

監修——永六輔

装幀——鈴木成一

©Kodansha Ltd. 1995, Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二—一 郵便番号 一一二—〇一  
電話 編集 〇三—五五五—三三三 販売 〇三—五五五—三三三 製作 〇三—五五五—三三三

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。  
なお、この本についてのお問い合わせは生活文化第三出版部にてお願いいたします。

ISBN4-06-207663-2 (生活文化第二)

## はじめに

靖国神社の本殿に向って右にある遊就館は附属の戦争博物館でもある。

ここに阿南陸相が自刃した時の血染めの軍服が展示されている。

八月十五日の日記の中で、いかに多くの人が阿南陸相自刃に触れ、その胸中を察した記述をしているか……。

責任をとった男の悲劇というなら多くの戦犯もそうだが、乃木將軍夫妻の自刃と並んで当時の大人達の中に、男の死に方を示したことになるのだろうか。

阿南陸相は八月十五日の日記を書かなかったが、その日のことは多くの人達の日記の中に書き残されたことになる。

戦争責任、その後の軍事裁判。

誰もその件については考えもできなかった時期に身をもって示した一人の軍人の死が、多くの日記の中に、それぞれの肩身のせまさを感じさせながら書きとめられているのを読んで、僕は遊就館の軍

服を思い出したのだった。

あの日阿南陸相に限らず、多くの軍人が命を絶ったと聞いているが、責任者として、その人格とあいまって、戦争の悲劇を象徴することになったのだろう。

この年、僕は十二歳だった。

「日本人は十二歳だ」

マッカーサー將軍の言葉を当事者として受けとめた十二歳だった。

そして五十年。

それぞれの八月十五日の日記の中に、十二歳の僕が見え隠れする感じで読んだ。

敗戦を予測できた人達の諦めきった日記。

最後まで勝つと信じこんでいた人達の日記。

そこに大きな違いがあると思ったのは間違いだった。

日記の中の日本人達は見事に冷静に八月十五日を迎え、歌人ならきちんと、その日の歌を詠<sup>よ</sup>んでいくことに驚く。

それとも混乱する中で、せめて日記を書くことによって冷静になろうと努力しているのだろうか。

十二歳の僕には日記を書いた覚えはない。

学童疎開先で、さアいよいよ東京に帰れるぞと思ったことは確かだが、日記を書くには帳面も、鉛筆も不足していた。

何もない子供には、先の心配も無かった。

あの時の、大人達のうろたえ方や、無気力な表情、それがこの日記の中には少ない。

日本中が呆然<sup>ぼうぜん</sup>としていたような印象がこの日記の中には少ない。

日記というものはそういうものだと思えるべきなのか。

それともこの日記の中から、呆然自失の様子を汲みとるべきなのか。

毎日の空襲が、日常の暮らしの中にとりこまれていて、その中で平凡な暮らしを書きつづっている日記もある。

戦争だろうが平和だろうが、毎日の暮らしそのものは二十四時間ずつの繰り返しで本質的に変らないのだろうかとも思ってしまう。

五十年前の日本人の日記が語りかけてくる時、この平和、この豊かさを、どう受けとめるべきなのだろうか。

あの時に、十二歳だった青島<sup>あおしまゆきお</sup>幸男が都知事になったニュースや武装集団オウム真理教のニュースを見ながら、僕は阿南陸相の血染め軍服を想い、政治家の責任をあらためて考え直している。

個人的な記録として残された日記の中から読みとるべきは何なのだろう。

それぞれの記憶<sup>きおく</sup>と重ねあわせながらこの記録を読み、ひょっとすると五十年前と今に共通する二ヒルといつていい虚しさ<sup>むなさ</sup>に気づき、そのことを、あなたの今日の日記に書き残してほしいと思う。

本土の八月十五日、沖縄の六月二十三日。

戦争の終わった日。

五十年前の日本人に、五十年後の我々が伝えることはできないが、今から五十年後の日本人に伝えることはできる。

その戦後百年にこそ、戦後五十年の今日を生きる我々が批判されることになるだろう。

昭和二十年（一九四五年）八月十五日。

本書は日記の形で凝縮されたその日の日本人の心情のタイムカプセルだ。

永<sup>えい</sup>  
六<sup>ろく</sup>輔<sup>すけ</sup>

八月十五日の日記●目次



## 第二章 悲痛の日

|        |        |    |
|--------|--------|----|
| 三好十郎   | 劇作家    | 18 |
| 永井隆    | 長崎医大医師 | 18 |
| 芦田均    | 政治家    | 22 |
| 梨本宮伊都子 | 皇族     | 23 |
| 海野十三   | 作家     | 24 |
| 釈迺空    | 民俗学者   | 28 |
| 中根美宝子  | 国民学校児童 | 28 |
| 峠三吉    | 詩人     | 30 |
| 寺崎英成   | 外交官    | 31 |
| 守田新平   | 専門学校生  | 32 |
| 鷺亭金升   | 戯作者    | 33 |
| 斎藤茂吉   | 歌人     | 34 |
| 高橋愛子   | 主婦     | 34 |
| 真崎甚三郎  | 陸軍大将   | 36 |

佐佐木信綱 歌人 38

## 第二章 戦死の兵一人

川田順 歌人 40

木戸幸一 内大臣 40

宮本顕治 政治家 43

村田省蔵 フィリピン特命全權大使 43

細川護貞 秘書官 46

大木操 書記官長 47

高木惣吉 海軍少将 49

入江相政 昭和天皇侍従 51

高見順 作家 52

遠藤三郎 陸軍中将 58

天羽英二 外交官 60

柳田国男 民俗学者 61

岡村寧次 陸軍大将 61

### 第三章 帝国ツイニ敵ニ屈ス

- 久保栄 劇作家 64  
高橋房男 歌人 65  
野口富士男 作家 65  
河辺虎四郎 陸軍中将 68

### 第四章 負けるのを待つ

- 山田風太郎 作家 72  
鈴木積 学生 95  
土岐善麿 歌人 96  
菊田一夫 劇作家 97  
大川周明 思想家 102  
今関啓司 画家 103  
伊丹万作 映画監督 106

森田草平 作家 107

田辺重信 陸軍軍医 109

塩見俊二 台湾總督府主計課長 112

奥野信太郎 中国文学者 114

宇垣纏 海軍中将 114

森下二郎 教師 117

小林一三 貴族院議員 118

堀越二郎 技術者 125

宇垣一成 陸軍大将 126

堀口大学 詩人 130

## 第五章 放心したる如し

山本登 小倉造兵廠管理班主任 132

玉川一郎 作家 134

白鳥邦夫 海軍經理学校生徒 137

中野重治 詩人 140

## 第六章 よくぞ生きて来たものだ

福原麟太郎 英文学者 141

東出昇 開拓団員 142

蜂谷道彦 広島通信病院院長 145

矢野正美 陸軍兵士 150

長岡健一郎 村役場兵事主任書記 158

中勘助 詩人 160

橋本徳寿 歌人 160

尾崎士郎 作家 163

吉野秀雄 歌人 164

原田種夫 作家 165

壺井繁治 詩人 166

植草甚一 エッセイスト 170

梅崎春生 作家 171

徳永直 作家 172

第七章 敵というものはなし

伊藤整 作家 174

加藤楸邨 俳人 178

高浜虚子 俳人 180

長与善郎 作家 180

安西冬衛 詩人 187

中村吉右衛門 歌舞伎俳優 192

内田百閒 作家 193

井伏鱒二 作家 197

荻原井泉水 俳人 199

谷崎潤一郎 作家 200

永井荷風 作家 202

前田夕暮 歌人 203

会津八一 美術史家 204

徳川夢声 俳優 205

## 第八章 強くし生きむ

中山義秀 作家 217  
伊東静雄 詩人 218

山口茂吉 歌人 226

亀井勝一郎 文芸評論家 226

岡本潤 詩人 227

東久邇稔彦 皇族 229

三田村鳶魚 随筆家 233

武者小路実篤 作家 234

堀口恒男（ピストン堀口） 拳闘家 240

久保田万太郎 作家 241

河上肇 経済学者 241

加藤シヅエ 女性解放運動家 242

秋田雨雀 劇作家 243

渡辺一夫 フランス文学者 244

中野卓 文学士 245

富塚清 機械工学者 247

岡本文弥 新内節太夫 254

平林たい子 作家 255

無着成恭 学生 257

阿部次郎 哲学者 259

古谷綱武 評論家 260

賀川豊彦 キリスト教社会事業家 262

詔書（ポツダム宣言受諾） 263



